

**頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム
平成 27 年度採択事業にかかる事後評価結果**

整理番号	J2701
代表機関名	京都大学
主担当研究者所属部局	アフリカ地域研究資料センター
関連研究分野	地域研究
主担当研究者	池野 旬
事業名	グローバル化にともなうアフリカ地域研究パラダイム再編のためのネットワーク形成

I これまでの事業実施により得られた成果

(1) 人的交流を通じた国際研究ネットワークの構築・強化についての評価

評 点 4
コメント
<ul style="list-style-type: none"> ・計画どおり 5 名（准教授 1 名＝315 日、ポスドク 4 名＝331 日、326 日、338 日、332 日）を派遣した。 ・計画していた 8 名の招へいに対し、最終的に 20 名の招へいとなった。 ・海外連携機関は、欧米のドイツ・イギリス・フランス・カナダや、アフリカの南アフリカ・カメルーン・エチオピア・マダガスカルを含み、多様であるとともに広い地域をカバーしている。派遣する若手研究者の選考基準は明確であり、適切な手続きによる選抜と十分な支援が行われている。 ・派遣・招へい計画については、若干の変更はあるが、概ね予定通りないしは予定を上回って実行され、適切な人を適切なきに派遣・招へいすることができており、高く評価できる。 ・なお、最終年度の招へいについては、計画では 2 名のところ、実績では 15 名に増加しているが、これは、京都大学のアフリカ地域研究資料センターや大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域専攻を世界に知らしめる活発な交流実績という面もあるものの、主要な招へい研究者の多忙による招へい期間の短縮や「不測の急務」による来日中止もあるなど、事前の計画に若干の不十分さがあつた可能性も否定できない。 ・若手研究者の交流や研究活動は、海外連携機関から高く評価されていることに加え、若手研究者の自己評価も詳細で具体的であり、本事業で派遣された若手研究者にとって有意義なものであつたことがよく分かる。また、全員が本事業を高く評価し継続を望んでいることが明らかであり、事業が有効に機能していたことが示されている。 <p>以上のことから、期待される成果は十分達成していると評価できる。</p>

(2) 国際共同研究課題についての評価

評 点 3
コメント
<ul style="list-style-type: none"> ・派遣された若手研究者が中心となって国際シンポジウムが開催され、寄稿者は限られているものの、成果が論文集としてまとめられていることは、事業の研究総括として適切である。 ・また、派遣された若手研究者の業績がやや少ない場合もみられるが、担当研究者や若手研究者のうち数名が、極めて活発な研究活動によって大きな実績を上げていることは高く評価できる。全体として、本事業による国際共同研究は、当初の目標を達成していると言える。 ・ただし、「①地域が空間的・時間的にどのように組織化されていると考えているか、②地域のロー

カルな知をどのように活用しようとしているか、③これからどのような地域をデザインしようとしているか」という3つの問題を通じて、アフリカ地域研究の「パラダイムを再編する」という目標については、地域認識・地域の知・地域のデザインの3つの概念をもって「アフリカ研究」という以外には拡散しやすい多様な研究領域をつなぎとめてはいるものの、それによって「パラダイム再編」と言えるまでの変化が起こっているかには疑問が残る。また、実施報告書に、具体的にどのようなパラダイム再編が起こったかについての説明もないことは残念である。

以上のことから、期待される成果は概ね達成していると評価できる。

II 今後の展望

評 点 4

コメント

- ・本事業が有効に機能し、既存のネットワークの更なる強化が図られ、京都大学のアフリカ研究の優位性を高めたことは明らかである。
- ・京都大学では新たにアフリカ学際研究拠点推進ユニットが設けられ、「京都大学アフリカ拠点」の設立に向けて整備が進められるなど、積極的な展開がみられる。また、本事業での活動に基づく新たな学術交流協定が締結されるなど、包括的なアカデミック・パートナーシップ体制が拡大している。人材育成の面でも成功していると評価できる。
- ・連携の成果がより明確に現れるのはもう少し先かもしれないが、今後も国際研究ネットワークのハブとして機能することが期待できる。

以上のことから、今後の展望は高く評価できる。

総合的評価

評 点 3

コメント

- ・本事業が、欧米とアフリカの諸機関との連携によって有効に機能し、京都大学の国際研究ネットワークのハブとしての優位性を高めたことは明らかである。
- ・「京都大学アフリカ拠点」の設立に向けて整備が進められるなど、積極的な展開がみられること、また、新たな学術交流協定が締結されるなど、包括的なアカデミック・パートナーシップ体制が拡大していることは評価できる。
- ・本事業の研究成果として、どのような「パラダイム再編」が起こったかについては不明瞭なところもあり、具体的な成果が十分でない点もあるが、派遣された若手研究者は活発に活動し実績を上げており、派遣先の研究者や招へい研究者とともに国際シンポジウムを開催し、論文集にまとめるなど、国際共同研究や個人研究の成果も上げている。
- ・なお、ヨーロッパの研究機関とは連携が十分とられているが、北米については限定的である。研究上の連携が意味を持つ研究機関があれば、積極的にネットワークの拡大を模索していくべきである。

以上のことから、総合的に概ね高く評価できる。

※評点に対する標語は下記の通り。

【I (1)、(2)】

4=十分達成している 3=概ね達成している 2=ある程度達成している 1=ほとんど達成していない

2

【Ⅱ、総合的評価】

4=高く評価できる 3=概ね高く評価できる 2=ある程度評価できる 1=ほとんど評価できない